

平成州紙



おりおりの記

中央銀行総裁の涙

一般社団法人 投資信託協会
副会長

乾 文男

1986年から3年間、カナダの日本大使館に勤務していたときの話です。

カナダは面積が998万km²と日本の約27倍、太平洋岸のバンクーバーと大西洋のニューファウンドランドの間の時差が4時間半という広大な国で、産業構造も州によって大きく異なるため、経済運営には苦労があったようです。

当時も製造業が集積するオンタリオ州・ケベック州の経済は好調でカナダ全体ではそれなりの成長を維持できていたものの、農林業や石油・鉱業に多くを依存する中西部諸州は停滞していたため、カナダ銀行（中央銀行）に公定歩合の引下げを求める大合唱が起きていました。カナダ銀行は「公定歩合は全国で統一のものでありカナダ経済全体の状況からは引下げは適当ではない。」と反論していましたが、議会やマスコミはこれに納得せず、ある日Globe and Mail紙に「日本では地域によって公定歩合を変えている。カナダも中西部地域の公定歩合を下げるべきだ。」という記事が載りました。これには私も驚き「日本では北海道東北開発金融公庫が同地域の振興のために優遇貸出金利を設けているが、これは政策金利であり中央銀行の公定歩合ではない。」という文章を同紙に投稿し、カナダ銀行をバックアップしました。最有力紙が日本の政策金利を間違っ引用するほど当時の論争は深刻だったわけです。

89年1月北村汎大使（88年6月のトロントサミットで竹下総理のシュルパ）から、「John Crowカナダ銀行総裁を大使公邸にお招きしてディナーをするので、さすが北村と言われる気の利いたス

ピーチを考えるように。」との指示がありました。大使の要求水準の高い注文に苦吟しましたが、Crow氏がちょうど2年前の87年2月にカナダ銀行総裁に就任したことに気づき、原稿を書き上げました。



当日は和気あいあいとディナーが進み、最後に北村大使が流暢な英語で、「明日はCrow総裁のご就任2年目にあたります。中央銀行総裁はどこの国でも孤独なポストと言われますが、ご就任以来の金融政策の運営にはさぞご苦労があったことと思います。総裁がカナダ経済をsustainableな軌道に乗せるため信念に基づいて金融政策を運営しておられることに心より敬意を表します。」と心のこもったスピーチをし、乾杯しました。

すると何と突然Crow氏が感極まって涙を流し、嗚咽（おえつ）が止まらなくなったのです。夫人が「Oh, John」と言って夫をハグし、何とも感動的な光景でした。

翌週のスタッフミーティングで私は大使から「いい原稿を書いた。」とお褒めにあずかり、financial attachéとして面目を施した次第ですが、今も昔も変わらぬ中央銀行総裁の仕事の厳しさを垣間見たできごとでした。